－民族のこころ (119) －

スィーワ・オアシスの思い出

飯　塚　正　人

エジプト西部，リビア国境にほど近いスィーワ・オアシスが明確にエジプト領となったのは，およそ2300年前。アレクサンダー大王の御世という。だが，ナイル渓谷から遠く離れたこの地は，その後も容易に「エジプト化」することなく，マグレブ地域に連なるベルベル人独自の文化を保持してきた。実際，アレクサンダー以降ナイル渓谷を拠点として成立した歴代のエジプト王朝も，なかなかスィーワにまでは手が回らず，この地は19世紀まで，事実上エジプト中央の支配を免れてきたのである。

1995年暮れ。カイロからただ往復するだけでも最低3泊4日はかかるこの町を私があえて訪ねてみる気になったのは，元はといえば，アレクサンダー好きの友人が「どうしても彼の墓が見たい」と言い出したためであった。ご記憶の方もあるかと思うが，実はこの年の始め「スィーワで遂にアレクサンダーの墓を発見」という衝撃的なニュースが世界をかけめぐっていたのである。さらにもう一つ，私としてはスィーワで是非見ておきたいものもあった。それは「エジプト最後のムアッズィン（礼拝呼びかけ人）」と呼ばれる小柄な老人である。エジプトに行かれたことのある方ならご存じだろう。現在のエジプトで，モスクに付随するミナレットから流れる肉声のアザーン（礼拝の呼びかけ）を耳にすることはまずない。われわれがふつう出会うのは，ラウド・スピーカーに乗って一種の騒音と化したアザーンだけなのである。いい機会だ，聞いてみたい。そう思ったら行動は早かった。

地中海岸のリゾート地として大発展を遂げつつあるマルサ・マトルーフを経て，スィーワに着いたのは翌日の午後。丘の上のすでに廃墟と化した旧市街の一角で，夕焼けを背に老人が唸った日没のアザーンは，寄る年波からであろう，声量に難なしとはいかなかったが，十分に美しいものであった。大満足で丘を下り，ホテルへの帰途につく。ふと気づくと，道の右手に小さな土産物屋。日が暮れてしまえば街は真っ暗で，他に行くあてもない。冷やかしに入ったのだが，実はここから忘れられないスィーワの夜が始まった。

この店の主人はマフディーさんといって，本職は観光局の局長をしている。一方，この時彼が店で話をしていた相手は，長期にわたって当地における調査を続けてきたスイスの人類学者レオパルド女史の夫レオナルド。二人は遠来の日本人がアレクサンダーの墓やスィーワの風俗に強い関心を持っているのを知ると，それこそ仕事そっちのけで翌日まであちこちを案内してくれた。もっとも，私にとって何より興味深かったのは彼らを通じて知り合ったスィーワの人々だったのだが.... 観光客からボルこともなく，善良そのものに見える彼らの口から「エジプト人！」の役人と地元の協力者に対する怒りが次から次へ溢れ出てくる。いわく「スィーワは最近湖の水位が上がって，このままでは水没しかねない。しかるに県知事は県都マルサ・マトルーフの開発にばかり熱心で，われわれの陳情にはまったく耳を貸さない。エジプト人はスィーワのことなど何も考えてはくれないのだ。」

そんな人々の声を日々聞いていたからだろうか。外国の援助を得てでも湖の水位を下げようとしていたレオパルド夫妻は昨秋エジプトを追放された。電話の通じないスィーワのこと，マフディーさんとの連絡も途絶えがちである。最後のムアッズィンも，そして今は亡い。